

## ジェンダーをめぐる言説の相違と立場性について

——イヴァン・イリイチの『ジェンダー』を参照点として——

立命館大学 安田智博

### 1. 目的

イヴァン・イリイチの『ジェンダー』は常に厳しい批判に晒されてきており、『ジェンダー』はエコロジカル・フェミニストを除いたフェミニストからは総じて否定的な評価であった。日本においては上野千鶴子によって「イリイチの議論は、それ自体、フェミニストにも反フェミニストにも受け容れられる両義的な性格を持っている」ことから、「よけいに始末が悪い」と批判をうけ [上野 1986:118]、また江原由美子からは「女性の状況への認識の歪曲と矮小化にその多くを負っている」ことから「イリイチはまったく不誠実である」といわれてしまう [江原 1985:41]。上野や江原らによるイリイチ批判には、エコロジカル・フェミニズムに対する批判も兼ねているが、その一方で、ボウルズやホックシールドらが中心になって批判した議論を踏まえた批判となっている。本報告では、後者の批判にあたる、アメリカの 1970 年代から 1980 年代初頭のボウルズやホックシールドたちに焦点をあてることで、『ジェンダー』批判とその歴史的背景を明らかにする。

そして、イリイチがフェミニストらの批判に対して、どのように応答し、その後の議論でボウルズらから受けた影響を検討する。そのため『ジェンダー』と『ジェンダー』以後の差異を掘り下げることが本報告の目的とする。

### 2. 方法

本報告は、“Feminist Issue vol.3”やボウルズらの文献から、イリイチが批判された論点や歴史的経緯を整理する一方で、『ジェンダー』と、『ジェンダー』以後に発表された文献との比較を行う。そしてボウルズやホックシールドらの『ジェンダー』批判の正当性と、イリイチのいうジェンダーの特異性を文献研究で浮き彫りにする。

### 3. 結果と結論

イリイチは近代以前における男女間の曖昧な相補性を、ヴァナキュラーな文化として肯定的であった [Illich 1983]。だが、ホックシールドはヴァナキュラーな文化自体が曖昧であり、さらには性差別を肯定していると批判した [Hochschild 1983:11]。ホックシールドたちの『ジェンダー』批判は的確であったが、『ジェンダー』の問題意識には、現代の豊かな暮らしこそが性差別を生じているとして、貧困に対する認識の急激な歴史的変化も含まれていた [Illich 1983]。

そして『ジェンダー』批判を受けてからは、よりいっそう歴史研究に依拠し、現代の性差別の転換点を、中世における教会の結婚制度の成立や貧困から見出していくことになる。イリイチの立場はボウルズやホックシールドらとは異なり、貧困に対して再評価を行うことで、貧困からくる妬みや羨望を批判する立場である。『ジェンダー』には、細分化された性差別の問題ではなく、急激な変化の契機を超長期にわたる歴史的射程から明らかにするものである。

### 4. 参考文献

Bowls, Gloria, 1983a, "Introduction: The Context," *Feminist Issues*, 3(1): 3-6.

———, 2009, *Living Ideas*, Gloria Bowles.

江原由美子, 1985, 『女性解放という思想』勁草書房.

Hochschild, Arlie, 1983, "Illich: The Ideologue in Scientist's Clothing," *Feminist Issues*, 3(1): 6-11.

Illich, Ivan, 1983, *Gender*, Marion Boyas. (=1984, 玉野井芳郎訳『ジェンダー——女と男の世界』岩波書店.)

上野千鶴子, 1986, 『女は世界を救えるか』勁草書房.